

## 空軍ニュース：中国は長距離爆撃機を開発中

漢和防務評論 20150602 (抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

中国は、戦略空軍と位置づけられる超音速長距離爆撃機を開発しようとしています。目的は、第二列島線のグアムの米軍基地等、敵基地を爆撃するためです。現有の H-6K 爆撃機では航続距離は満たしても、ステルス性がなく、速度が遅いため中国国境を出て間もなく、日米の戦闘機に迎撃されてしまうからです。ロシアから TU-22-M3 など既存の技術を手に入れたいようですが、ロシアは中国に戦略兵器は売らない方針のようです。

KDR バンコク特電：

中国の H-6 爆撃機は、全て H-6K 型だけになるのだろうか？或いは H-6K は少量生産されるだけなのだろうか？

最近中国空軍は、「戦略空軍建設問題に関する討論会」を開催した。会議で得られた結論はこの疑問に対して答を出している。

KDR が独自に入手した情報によると、最近開催された空軍の重要会議において、中国空軍を初めて”戦略空軍”と位置付けた。中国軍は、今まで、第二砲兵のみを戦略軍種と位置付けていた。空軍を”戦略空軍”と位置付けることは、空軍の核戦力を強化する必要があるため、だけではない。会議が列挙した優先開発すべき武器システムを見ると、”宇宙軍の建設”が将来の戦略空軍の発展方向となっている。会議は、改めて空軍の守備範囲を提議し、従来の上空 20KM から、高空宇宙の方向に向けて大幅に拡大させた。会議は、新型長距離爆撃機、中距離・遠距離対弾道ミサイル、対衛星システム、及び戦略ミサイル早期警戒システムを重点的に開発するとともに、戦略空輸能力の強化を要求した。会議は、2 度、新型長距離爆撃機の開発の重要性を提議した。それは、空軍の爆撃、探知、早期警戒能力を第二列島線まで延伸させ、台湾海峡有事の際、強敵（註：米軍を指す）の干渉を排除するため、新型長距離爆撃機と巡航ミサイルを利用し、強敵の作戦基地を攻撃出来るよう要求する主旨であった。

このことは、中国空軍が開発した H-6K と新型爆撃機開発の意図を明確に示し、第二列島線を中心であるグアム島攻撃の必要性を示したものだ。この会議では、新型長距離爆撃機の具体的な技術指標について議論はなかったが、この問題に関する空軍内の長年にわたる争論を決着させた。この争論とは、新型長距離爆撃機を開発すべきかどうかであった。

実際、H-6K が開発されたということは、空軍が長距離爆撃機を求めていることを示している。中国は新型長距離爆撃機の開発が大幅に遅れているため、過渡的な機体として H-6 を改修せざるを得なかったのである。

中国の軍事工業は、超音速大型爆撃機を開発した経験が無い。したがって開発への動きが遅れがちである。ウクライナからの情報によると、ソ連が崩壊して間もなく、中国は TU-22M-3 爆撃機の技術情報を欲しがり、ウクライナからこの爆撃機を 1 機獲得しようとした。しかし同型爆撃機は、国際条約 (START I/II) で管理された機種であるため、中国は獲得できなかった。中露間の軍事装備品輸出入交渉の過程でも、時折、中国が TU-22M-3 を欲しがっているとの伝聞情報を聞く。しかし KDR が何度もこの問題についてロシアの様々な部門に問い合わせた結果、彼らは常に、未だ交渉の議題になったことは無い、と答えている。

しかし如何に説明しようとも、確かに中国は TU-22M-3 のような中型爆撃機技術に興味を示していることは明らかだ。今回の”戦略空軍建設”会議は、中国が新型長距離爆撃機を求める目的、及び使用方を明らかにした。それはすなわち、グアムの米軍基地等、第二列島線の敵基地を攻撃するためには、CJ-10 型巡航ミサイルの発射台としての新型爆撃機が必要であるからだ。

H-6K の基本性能に就いて述べれば、中国が開発しようとしている新型長距離爆撃機は、少なくとも 6 発の巡航ミサイルを搭載する必要がある。そして第二列島線の敵基地を爆撃するためには、超音速で長い航続距離が必要であり、第一列島線の外、少なくともバシー海峡より前方に進出しなければならない。作戦半径から見れば、現在の H-6K でも実行可能である。それでは新型長距離爆撃機を開発する意図は何処にあるのか。それは一定程度のステルス性と速度が必要だからだ。そうしないと、H-6K では国境を出てから間もなく迎撃されてしまうのである。技術的要求から見ると、新型長距離爆撃機は、H-6K よりも寸法がやや大きく、作戦半径は 2500 乃至 3000KM、超音速で、一定程度のステルス性を備えた機体になる。

搭載武器はすでに完成している。エンジンは開発中で、WS-18 型しかないであろう。同時に試作機段階では、試験飛行用エンジンとして D-30 型エンジンが使用される可能性がある。中国は、Y-20 型輸送機の開発に成功した後、大型爆撃機を開発を加速させているようだ。2015 年 1 月及び 4 月の衛星写真を KDR が分析した結果、中国の大型飛行場に長距離戦略爆撃機の実在は確認されていない。北京駐在の西側軍事情報筋も類似の情報を伝えていない。しかし戦略爆撃機の開発は秘密の度合いが極めて高く、如何なる戦術作戦機に比べても保全度が高い。米軍が F-117 及び B-2 を開発した当時、徹底した秘密保全措置が採られた。試験飛行も時間を指定して行った。B-2 は常時格納庫に入れられ、工場の従業員も家人に情報を漏らすことを禁じられた。

ロシアも新型爆撃機を開発中である。中露のネット上には一種の意見が掲載されていた：すなわち、中露は聯合して新型爆撃機を開発してはどうか、と。

今のところ、双方の軍事協力関係者はこの問題で交渉を行ってはいない。KDR が中露間の SU-35 の交渉過程を見て得た結論は：両国の現在の戦略的相互信頼関係に照らせば、このような協力は実現しない。ロシアは爆撃機技術を中国に移転することは無い。ロシアの”戦略兵器は中国に売らない”との方針は、この 20 年間不変である。それに反して、本誌が知り得た状況では、モスクワは、H-6K が極東の

大都市を攻撃可能であり、そしてロシア製エンジンを使用している現実に対して全く気にしていないようだ。

以上